

■第22回院内集会

2月7日（木）、第22回院内集会を参議院議員会館B104室にて開催しました。出席者は60名でした。午後2時という開会時間が功を奏したのか、多くの方々が遠方から馳せ参じてくださり、初めて院内集会に参加されるお顔も散見しました。

今回の院内集会は、具体的な議題あるいはテーマを設けて賛否を討議するかたちをとらず、これまでの福島原発行動隊の歩みと今後の在り方について意見を交換することを目的として開かれました。そのため会場は車座あるいは円卓方式にして各人の前に名札を置き、いわゆる執行部との質疑応答などはせず、各自の意見を全出席者が自由に開陳する場として設定され、国会議員とメディアの来場も今回はご遠慮願いました。

結成以来2年近く経っても続く模索の状況、さらに政権交代という政治的条件の変化のなかで、われわれは本来の目的をいかにして実現するか、さまざまな考えが3時間にわたって交わされました。



■福島第二原発視察報告書を持って東電を訪問

伊藤 邦夫（東京大学名誉教授 工学博士）

福島原発行動隊の東京電力福島第二原子力発電所視察（1月16日）に関する概要はSVCF通信31号にて報告した通りです。1月30日には、視察参加メンバーによる事後打ち合わせを行った後、報告書を作成しました。



福島第二原発視察報告書を高瀬部長に手渡す伊藤団長

2月8日、行動隊から5名が東京電力本店を訪ね、応接された原子力・立地業務部長高瀬氏に、視察に関して図っていただいた便宜にお礼を述べるとともに、報告書のハードコピーおよび電子記録を手渡しました。

冒頭、訪問者を代表して私から、「この視察によって第二原発で3/11津波に対して東京電力並びに協力企業の皆様が果たされた働きに強い印象を受けた」ことを伝え、第二原発の増田所長にもこの報告書を読んでもいただけるように取りはからっていただきたいとお願いしました。

●報告書の公開について

面談では、

1. いわゆるマスコミとは別の立場と目で、福島原発の状況を世間一般に知らせるのも私ども行動隊の重要な使命の一つと考えるので、この報告書をウェブサイトを通じて公開したい。

2. この公開は、また（それほど知られていない第二原発での出来事を世間に知らせることになるので）東京電力にとってもメリットがあるでしょう。

と続けました。

公開に先立って、視察団と現地の増田所長との間のQ&Aの記述等について高瀬部長からのご意見を頂きたいと伝えたところ、「そのようにします」との返答がありました。行動隊サイトへの報告書の掲載公開までにはもう少し時間がかかりますのでご了承をお願いします。

●直球は見送りに

この度の面会は和やかな雰囲気ともなり、訪問メンバーからは様々な「話題」がでました。なお、意見の部分はあくまで私の個人的見解であることを予めお断りします。

“別の立場と目”に関連して、「第一原発の構内のモニタリングを、東京電力とは直接の関係のない行動隊にまかせた方が世間の納得が得られるのではないですか」というメンバーの発言には、高瀬部長からは「いきなり直球と来ましたね」との応答がありましたが、この直球は“見送り”されました。

また、「建設業の免許を取って第二原発の瓦礫の片付けなどの手伝いをするという案はいかがでしょうか」との発言にたいしては「請負、委託などの契約ごとともなり、まず入札参加資格登録などもあり、なかなか難しい場面もあろう…」という機械的返答がありました。

●事故調への「虚偽説明」

“原発内の状況の世間への公開”に関連して、先日の朝日新聞（2月7日付）に掲載された記事「東電、事故調に虚偽説明」も話題になりました。この日の東電



福島第二原発視察報告書

の説明も新聞に載っている広報部の見解「故意にやったのではない」と同じでした。

併せて、問題の場所は単に通り過ぎるだけでも（前の経験から）9mSvの被ばくが予想されるところであり、調査に同行・案内した場合に作業員が受ける被ばく量は（年間許容量に比べて）非常に大きいという事実も付け加えられました。

私はここでも原発事故における作業員の被ばくのやっかいさを感じました。ここで我田引水。「人海戦術によって作業員の被ばく量を薄める」ことに、行動隊が原発作業参加することの意義がある、との思いを強くしました。

東京電力と行動隊の間で今後も継続的に話し合う場を持ちたいという私どもの前からの要望に対しては、「今回の訪問のような簡単な形式で行う」、「前もって質問を提出する」ということで、これを受け入れることが再確認されました。

■直球を連投して三振を

「第二原発を視察して、第一原発の視察の意義をますます感じている」という発言に対しては「状況が整えばいずれ（私どもの）視察を受け入れることになるでしょう」という返答がありました。「私どもの継続的対話における重要なテーマの一つは“まだですか”と問い合わせることです」に対しては「立て続けに直球を投げ込まれば三振してしまうかも知れない」という答えがありました。

関連して、私どもは（東京電力の）原子力改革監視委員会に対して「行動隊の第一原発視察の要望を受け入れるよう」東京電力に勧告することを申し入れたかったので、その窓口（本日の担当者が）なって欲しいという要望に対しては「申し入れ書をそのまま取り次ぐ」との返答がありました。

皆様、直球を投げ続けて三振を取りましょう。三振三つ取ればスリーアウトチェンジになることですし。

■川内村でモニタリングを行いました

川内村帰還者支援事業の一環として、伊藤（勝）、篠田、家森、塩谷が2月6日（水）に下川内市区の個人住宅内・外の放射線量率の計測を行いました。

我々にとっては初めての雪の降る中のモニタリング作業でしたが、郡山ー川内村往復の雪道ドライブを含めて、予定通り無事終了しました。

積雪があるときの住宅内・外の線量率の計測値は雪の消えた時の計測値との比較として貴重なデータとなるものと考えています。

住宅内・外のモニタリング終了後、以前に発見したホットスポットに移動して、関西電子（株）が新しく開発した検出器の比較校正を行いました。またその様子をBS-TBSの記者が取材しました。（塩谷記）



雪の裏山で除染効果を検証する伊藤（勝）行動隊員

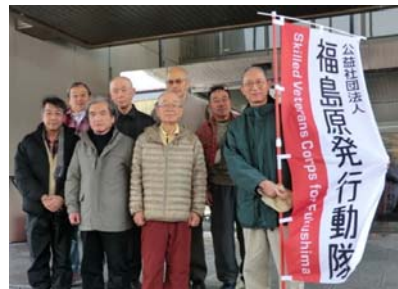
■福島原発行動隊の幟旗を作製しました。

公益社団法人福島原発行動隊では、幟旗（別名桃太郎旗）を作製しました。

旗の作製にはさまざまな思い入れがあります。旗には、「旗幟鮮明にする」とか「旗の下に結集する」、あるいは「旗を振る、旗を立てる」など意義ある言い回しが数多くあります。

行動隊では、すでに本旗を東京電力福島第二原子力発電所視察時に事務本館玄関前にて掲げました。また、街頭での請願署名活動にもこの旗を立てて署名のお願いをしています。あわせて、川内村でのモニタリング作業現場にも旗を掲げることとしています。

本旗は、行動隊として活動される方々への貸し出しも予定していますので、ご入用な方は事務局までお問い合わせください。（家森記）



福島第二原発の視察時にも幟旗を掲げました（事務本館玄関前）

■BS-TBSが行動隊を取材しています

BS-TBSの番組「NEWS21サタデースコープ」が、1月下旬ころから福島原発行動隊を取材しています。この取材は、2月16日（土）放映予定の「企画・特集、この国に生きる」のためのものです。

これまで、山田理事長へのインタビューをはじめ、川内村でのモニタリング作業の



模様、川内村役場副村長の猪狩氏へのインタビュー、街頭署名活動の様子などがカメラに収められました。

放映は2月16日（土曜日）午後9時から10時までの一時間です。

■第2次請願署名活動を開始しました

すでに「SVCF通信」前号でご案内したように、福島原発行動隊は、①福島第一原発の事故収束をめざす国家プロジェクトの法制化などを求める請願署名の第2次活動を開始しました。

ただ「SVCF通信」前号において、「第1次募集で集めた約3,000通のご署名は、来月早々に衆参両議院でご支援くださる議員を通じて、内閣府および関係省庁に提出する」と報告しましたが、規程上、同じ請願者が同一会期内に同一趣旨の請願書を重複して提出することができないことが判明しました。そこで、集められた署名は第1次分、第2次分を合わせて今国会会期中に提出することにいたします。また提出にあたっては、衆参両議院の議員を通じて国会請願課に提出することになります。

事務局では街頭での署名活動のために行動隊の紹介ツールの他、ノボリ、ゼッケンなどを用意しています。必要な方は事務局までご相談ください。